

A.N.ホワイトヘッドの中期思想における「いま - ここ」の認識論的意義について

On an Epistemological Significance of 'now-here' in Whitehead's Philosophy of Science

同志社大学文学部研究科博士課程（後期）哲学専攻在籍

Department of Philosophy, Doshisha University, PhD candidate

遠藤正水

ENDO masami

【キーワード： A.N. ホワイトヘッド、認識論、時空】

本発表の目的は、A.N.ホワイトヘッド（Alfred North Whitehead）が展開している論究に即して、「時間系列」（time-series）と「いま - ここ」（now-here）との連関の含意を明らかにすることである。ホワイトヘッドにしたがえば、相対性理論で要求されるような「時間系列」は「経験の直接的事実」（immediate fact of experience）から「延長抽象化の方法」（the method of extensive abstraction）によって構成できる。すると、「経験の直接的事実」は「いま - ここ」で把握されるのだから、「時間系列」と「いま - ここ」との関連が問われねばならない。そこで本発表では、「出来事」と「いま - ここ」に関連して導入される「持続」（duration）と「知覚しつつある出来事」（percipient event）に考察の照準を合わせて、「時間系列」と「いま - ここ」との連関の含意を明らかにしたい。

The purpose of this paper is to discuss the interconnection between 'time-series' and 'now-here', in accordance with A.N.Whitehead's philosophy of science. According to Whitehead, the 'time-series', which is demanded by the theory of relativity, is constructed by 'the method of extensive abstraction' from an 'immediate fact of experience'. Then, as an 'immediate fact of experience' is apprehended in 'now-here', the relation between 'time-series' and 'now-here' must be considered. So in this paper, I would like to clarify the interconnection between 'time-series' and 'now-here', especially focused on concepts of 'duration' and 'percipient event' that are introduced in connection with 'event' and 'now-here'.

## I 問題の所在

本発表の目的は、『自然認識の諸原理』(*An Enquiry Concerning The Principles of Natural Knowledge*, 1919) と『自然という概念』(*The Concept of Nature*, 1920) において A・N・ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead, 1861-1947)が展開している論究に即して、「出来事」(event)と「いま - ここ」(now-here)に関連して導入される「持続」(duration)と「知覚しつつある出来事」(percipient event)に考察の照準を合わせて、「時間系列」(time-series)と「いま - ここ」との連関の含意を明らかにすることである。

それを目的とする理由は、ホワイトヘッドによるアインシュタインの相対性理論に関する評価の問題にある。すなわち、ホワイトヘッドは、アインシュタインの相対性理論について「私の判断では、アインシュタインは、彼の素晴らしい数学的手法の発展をまさしく疑わしい哲学の狭域に束縛している」(CN p.vi) と論評し、相対性理論の理論的側面に対して肯定的に評価しながら、相対性理論の科学哲学的側面に関する批判を行なっている。ホワイトヘッドが依拠する科学哲学的立場は、「自然科学において、『説明すること』が意味するのはただ、『連関』(interconnexion)を発見することである」(CN p.97)と表明されている。この立場に依拠してホワイトヘッドは、相対性理論で要求されるような「時間系列」を「経験の直接的事実」(immediate fact of experience)から「延長抽象化の方法」(the method of extensive abstraction)によって構成して、「時間系列」と「経験の直接的事実」との連関を詳述している。「延長抽象化の方法」による「時間系列」の構成は次のように進められている。まず、「経験の直接的事実」である「持続」(duration)は、一つの「持続の族」(family of duration)に属し、「同時性」(simultaneity)によって制限される「時間的厚み」(temporal thickness)を含む「全自然」(all nature)として区別される。つまり、「持続」の「時間的厚み」を制限していくことによって、「瞬間」(moment)は「瞬時の全自然」(all nature at an instant)として捉えられ、諸々の「瞬間」からなる「順序」(order)を備えた「時間系列」が一つの「持続の族」内で構成されているのである。しかも、ホワイトヘッドは複数の「持続の族」の存在を認めて、複数の「時間系列」がどのようにして比較可能になるのかを述べている。すなわち、一つの「持続」に属する「瞬時空間」(instantaneous space)の「基本的属性」(fundamental property)を別の「持続」に属

する「瞬時空間」との「交差」(intersection)によって定義し、「瞬時空間」の「基本的属性」の「順序」を「時間系列」の「順序」からそれぞれ導出し、その上で、一つの「瞬時空間」で「絶対位置」を定めることによって、当該の「瞬時空間」と「交差」する別の「瞬時空間」との間で、「時間系列」間の「順序」が比較可能になる。別言すると、複数の「時間系列」の比較は、すべての「持続の族」に共通な一つの「順序」があるから可能になるのではなく、それぞれの「持続の族」の「瞬間」に「絶対位置」が定められて可能になるのである。

しかし、それぞれの「瞬間」で定められる「絶対位置」という概念にはさまざまな問題がある。先に述べたように、ホワイトヘッドの依拠する科学哲学的立場は「経験の直接的事実」の連関を説明することであるのだから、「絶対位置」は「経験の直接的事実」にその起源を求められなくてはならない。とはいえ、「絶対位置」が「経験の直接的事実」のどこに定位されるかは不分明である。そこで、本発表では、これを明らかにすることで、「いま-ここ」と「時間系列」との連関を明晰にしたい。

## II 「出来事」

ホワイトヘッドは、認識に原初的に与えられているものを論じるために、次のような文言から始めている。「まず第一に私たちにとって一般的事実が措定されている。すなわち、何ものかが進行している。つまり、定義を要する生起が存在する」(CN p.49)。この文言によれば、「一般的事実」とは「何ものかが進行すること」もしくは「生起」であり、この「生起」が原初的に意識されるものである。しかも、この「一般的事実」についてホワイトヘッドは、「当の一般的事実は私たちの把握にとって、二つの要因を産する。それを私は「識別されているもの」(the discerned)と「識別され得るもの」(the discernible)と命名する」(CN p.49)と捉え直し、「生起」という「一般的事実」を「識別されているもの」と「識別され得るもの」とに分けて論じている。しかし、何故ホワイトヘッドは「一般的事実」を二分しているのだろうか。

ホワイトヘッドによれば、「識別されているものは、一般的事実に属する諸要素からなり、諸要素はそれら自身の個々の特異性(peculiarity)を伴って区別されている(discriminate)。それは直接的に知覚される場(field)である」(CN p.49)。すなわち、「識別されているもの」は「直接的に知覚される場」であり、「直接的に知覚される」ことを「それら自身の個々の特異性を伴って区別されている」とホワイトヘッドは捉えている。例えば、私たちは見た

り聞いたり触れたりして、この部屋の中を見分ける。区別されたこの部屋の中には、目の前の机とか目の前の紙とか、いわゆる対象として区別される「実体」(entity)がある。しかし、ホワイトヘッドは、ピラミッドの例(cf. CN p.77)を挙げて、いわゆる対象もまずは「直接的に知覚される場」として取り扱えることと主張している。だから、ホワイトヘッドは、「一般的事実」にこうした「直接的に知覚される」という制限を認めて、「識別されているもの」を定立しているのである。こうした「直接的に知覚される場」である「識別されているもの」こそが「出来事」なのである (cf. CN p.52)。

しかし、ホワイトヘッドによれば、「この場に属する諸実体 (entity) には、この個々の仕方では個別的に区別されない他の実体との関係がある」(CN p.49)。これはなにを意味しているのであろうか。例えば、この部屋の中という「直接的に知覚される場」である「出来事」が識別され、その「出来事」の中で個々の「実体」が区別される。しかも、個々の「特異性」を伴って区別された「実体」は個々の「特異性」を伴わない「実体」との関係性を有する。ホワイトヘッドは、「こうした他の実体は識別された場に属する諸実体との関係にある関係項(relata)としてのみ知られる」(CN p.49)と述べているから、「出来事」内で個々の「特異性」を伴って「実体」が区別された途端、それと関係しているけれども、「特異に区別」されていない「実体」もまた知られることになる。したがって、ホワイトヘッドは、「直接的に知覚される」という制限が課せられないそうした「実体」の属する「場」も「一般的事実」に認めているのである。これがホワイトヘッドの言う「識別され得るもの」である。それでは、「直接的に知覚される」ことのない「識別され得るもの」について私たちはどういった把握をしていることになるのだろうか。

### III 「いま」と「持続」

IIでは、「生起」である「一般的事実」に「直接的に知覚される場」としての「出来事」があることを論証し、しかも、そうした「出来事」が把握されている際にはそれとの関係があることしか知られていない「場」、すなわち「識別され得るもの」もまた把握されている点を明らかにした。けれども、「出来事」と「識別され得るもの」との関係はまだ説明されていない。

「出来事」と「識別され得るもの」との関係について、ホワイトヘッドは次のように述べている。「完全な一般的事実は、生起として措定されているのだが、…識別され得るもの

であり、それは識別されているものを含む(comprise)」(CN pp.49-50)。すなわち、この文言にしたがえば、原初的に与えられている「一般的事実」は「識別され得るもの」であり、しかも、「識別され得るもの」と「出来事」との関係は「識別され得るもの」が「直接的に知覚される場」としての「出来事」を含むという関係にある。しかし、こういった意味で「識別され得るもの」は「出来事」を含むのであろうか。

ホワイトヘッドは次のように説明している。すなわち、「この一般的事実は、私が識別され得るものと呼んできたものである。しかし、今後は、それを「持続」と呼ぶことにし、それによって意味するのは、同時性(simultaneity)という属性によってのみ制限される、自然のある一定の全体である」(CN p.53)。この文言から分かるように、「同時性」という制限によって「識別され得るもの」が定義され、しかも、そうした「識別され得るもの」は「自然のある一定の全体である」と捉えられている。この文言の意味はなにであらうか。既に指摘したように、「識別され得るもの」は、「直接的に知覚される」ことなく「出来事」と関係を有する「場」であった。すなわち、「識別され得るもの」は、「直接的に知覚される場」との関係にあることだけが区別されている「場」であり、具体的になにが属しているのかを言うことのできない「場」である。ホワイトヘッドはそのような「場」を「自然のある一定の全体」と言い表しているから、「直接的に知覚される場」を超えてあり、しかし、なにが属しているかを具体的に言えない「場」とは、「直接的に知覚される場」を包み込む「全自然」としてしか表現できない「場」であらう。その「直接的に知覚される場」との関係にあるという制限を、ホワイトヘッドは「同時的である」という制限として表現している。ホワイトヘッドの「同時性」は「いま」を意味している。したがって、「同時性」という制限は、「直接的に知覚される場」を含むがゆえに把握される「識別され得るもの」の「いま」を表した制限であると言えよう。「識別され得るもの」は「出来事」である「識別されているもの」を包み込む仕方、で、「一般的事実」として、私たちに原初的に与えられており、それが「持続」と呼ばれるのであるから、「持続」は「同時性」という「いま」によって制限されている「自然のある一定の全体」である、と理解できるのである。

さらに、ホワイトヘッドによれば、「一般的事実」は「生起」であるから、「持続」は「同時性」という「いま」によって制限されるものではあるにせよ、「生起」という局面をもつ。ホワイトヘッドはその局面について、「それぞれの持続が生じ、推移するということが自然の過程の提示である」(CN p.55)と述べている。すなわち、「生起」としての「持続」は「同時性」に制限された「一般的事実」であるから、ある「いま」によって制限される「持続」

が別の「いま」によって制限される「持続」へと「推移」する。つまり、ある「持続」が生じ、それから、それと「推移」という関係にある別の「持続」が生じているのである。しかも、ホワイトヘッドは、「推移」という関係で関係づけられている諸々の「持続」を「持続の族」と呼び、既に指摘していたように、「持続の族」を「瞬間」からなる「時間系列」の構成に用いているのである。

#### IV 「ここ」と「知覚しつつある出来事」

IIでは、「生起」である「一般的事実」のうちの「識別されているもの」が「直接的に知覚される場」である「出来事」であることを論証した。IIIでは、「出来事」と「持続」との関係、および、「出来事」に課される「直接的に知覚される」という制限に注目して、「持続」は、「いま」によって制限される「全自然」であることを論述した。すると、「持続」は「出来事」との関係によって定まることになる。しかし、「出来事」が「直接的に知覚される」ことの意味は未だ詳らかでないので、その意味が問われなければならない。

ホワイトヘッドは、「知覚」について「知覚は自然内から (from within nature) のものであり、外的な探索(external survey)ではない」(PNKp.70)と述べて、まず、「知覚」が自然を外から把握することではないと確言する。それでは、「知覚」が自然についての内的把握であることの意味はなにか。

ホワイトヘッドによれば、「知覚は、諸々の出来事…についての感知(awareness)であり、…この感知は、識別された複合体内で、一つの出来事ないしは一群の出来事と判明に関係づけられる。この出来事は知覚しつつある出来事(percipient event)と呼ばれる」(PNKp.68)。IIで指摘したように、ホワイトヘッドは、普通は対象と呼ばれるものも「出来事」として取り扱うから、例えば紙や机のような対象は「出来事」として把握される。だから、「知覚」は様々な「出来事」の「感知」である。このような「感知」が「識別された複合体」に関わっているので、ホワイトヘッドは、「知覚」を「出来事」と「出来事」との関係として捉えている。紙や机のような様々な「出来事」は、「直接的に知覚される」という制限のもとで、紙がその先の机の上にあることが把握されているように、「出来事」と「出来事」とが何らかの仕方に関係している複合体として「知覚」されている。しかも、「知覚」される諸々の「出来事」の複合体と判明に関係づけられるのは「知覚しつつある出来事」である。だから、「知覚しつつある出来事」から諸々の「出来事」の複合体への関係が「知覚」されていることになる。したがって、「知覚は自然内から (from within nature) のもの」なので

ある。ホワイトヘッドの「知覚」について、こうしたの理解が得られると、「出来事」が「直接的に知覚される」ということの意味は、「知覚」が「知覚しつつある出来事」と諸々の「出来事」間の関係との関係の「感知」である、という点に求められよう。

しかも、ホワイトヘッドにしたがうと、「知覚されつつある出来事はその関連付けられた持続の意味を明らかにする」。(PNKp.70) すなわち、Ⅲで考察した「持続」は「知覚しつつある出来事」によってその意味が判明になる。すなわち、「持続」の制限である「同時性」という「いま」の意味もいっそう判明となる。というのも、ホワイトヘッドは次のように述べているからである。「当該の諸々の出来事を含む自然という全体の同時性は、知覚しつつある出来事に対する自然という背景の特別な関係である」(PNKp.68)。Ⅲで述べたように、「自然という全体の同時性」は、「持続」を制限する「同時性」である。すると、「持続」の「いま」とは、「知覚しつつある出来事」との関係における「いま」であることになる。つまり、「持続」は、「知覚しつつある出来事」と「同時的である」という意味で、「いま」によって制限されているのである。

## V 「いま - ここ」と「共成性」

Ⅳでは、「出来事」が「知覚しつつある出来事」と関係する時には「直接的に知覚される」という制限が生じ、「持続」が「知覚しつつある出来事」と関係する時には「いま」という制限が生じることを明らかにした。ホワイトヘッドによれば、「持続」と「知覚しつつある出来事」との関係から「いま」という制限だけでなく、「ここ」という制限も生じる。しかも、「持続」から「時間系列」は構成されるので、「いま - ここ」と「時間系列」との連関が問われねばならない。

まず、ホワイトヘッドは、「持続」と「知覚しつつある出来事」との「共成的(cogredient)」関係を次のように定義する。すなわち、「ある出来事が、関連付けられた持続内での多義的でないここ (unequivocally here) の知覚しつつある出来事であるという属性を有するならば、その出来事は当の持続と『共成的』であると述べることにしよう」(PNK p.70)。つまり、「共成的」関係とは、「持続」に対する「知覚しつつある出来事」の「ここ」という関係である。しかも、ホワイトヘッドによれば、「持続」はただ一つの「知覚しつつある出来事」と関係するだけでなく、一つの「持続」内で、様々な「知覚しつつある出来事」とも関係を有している。「一つの持続はそれと『共成的』な多くの出来事を有しうる。すなわち、かの持続を通じて時間的に現在であり、かつ、ここ - 現在の出来事との関係で『そこ』の

一つの特的な意味を決定するような、任意の出来事は『そこ - 現在』の出来事である」(PNK p.70)。この文言によれば、ある「知覚しつつある出来事」は、ある「持続」に対して、「ここ」という関係を持ち、しかも、その「持続」は別の「知覚しつつある出来事」とも関係する。すると、別の「知覚しつつある出来事」は、「ここ」という関係を有する「知覚しつつある出来事」に対して、当の「持続」を媒介に「そこ」という関係を示すことになる。別言すれば、一つの「持続」と「共成的」関係にある様々な「知覚しつつある出来事」のうちの一つを「ここ」として固定すれば、その「知覚しつつある出来事」と一つの「持続」との「ここ」という関係から、当の「知覚しつつある出来事」と別の「知覚しつつある出来事」との関係は、当の「持続」において「そこ」という関係として定まる。したがって、「共成的」関係は、一つの「持続」内の「ここ - そこ」という空間的位置を決定する関係である。だからこそ、ホワイトヘッドは、「共成性は一つの持続内の絶対位置の関係である」(PNK p.71)と述定するのである。

このようにしてホワイトヘッドの論述にしたがえば、「共成性」によって定まる「絶対位置」は、複数の「時間系列」に属する「瞬間」の「交差」によって意味が定まる「瞬時空間」上の幾何学的実体とは異なり、一つの「持続」のみで「ここ - そこ」としてその意味が定まるような「絶対位置」と言える。したがって、「いま - ここ」の認識論的意義は、こうした「絶対位置」との関連で理解されねばならないのである。

#### 註

A.N.ホワイトヘッドの著作については、引用および参照に関する注記のすべてを本文中に略号と頁数で記す。略号については以下の通りである。

CN : A.N.Whitehead, *The Concept of Nature*, The Cambridge University Press, 1955.

PNK : A.N.Whitehead, *An Enquiry Concerning The Principles of Natural Knowledge*, The Cambridge University Press, 1955.